

タリタ・クム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第23号

2014年11月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

「平和の実現への招待」

英国聖公会 West Yorkshire and the Dales

(ウェストヨークシャー・アンド・ザ・デールズ) 教区

元リーズ大学病院チャプレン 司祭 半田 ウィリアムズ 郁子

平和を実現する人々は幸いである。

その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイによる福音書5:9)

私たちは「平和」という言葉を聞く時に、どのようなことを考えるでしょうか。それは戦争のない状態でしょうか。表向きに戦争が起こってさえいなければ「平和」と呼べるのでしょうか。表面上の争いがなくても、心が憎しみや妬みにとらわれていたり、心の傷の痛みを耐えているとすれば、それは本当の意味での「平和」があるとは言えないでしょう。

一言で「平和」と言っても内容は様々です。例えば、日本人の文化では、調和を大切にする、または人間の上下関係を大切にするという価値観から、目上の人と違った意見は発言せず、表面では多くのところが、平穏で「平和」に見えるかもしれません。しかし、例えば日本での過労死が一向に減らないという報道ひとつをとっても、表面的な「平和」を保とうとするあまり、勤勉な国民性も相まって、多くの職場などで、何か基本的に大切なものが蔑ろになっているのではと危惧されます。一人一人の人間としての価値が軽視される傾向があるのかもしれません。

「平和」というものを考える際、国家レベルで考える前に、個人レベルでの人と人との間の「平和」の構築に目を向ける必要があります。「平和」の構築では、それぞれの人格や立場や意見を尊重する姿勢が重要になります。そういった尊重の姿勢から共に生きる道を模索することこそが、「平和」を実現することにつながります。「平和」というのは、ただ戦争の無い状態を維持するだけでなく、違う立場にある者同士が互いを認め合い、共存していくことを望む生き方なのです。特に弱い立場の人の声を聞いていく努力をすることは大切です。主イエスが示された道であります。

ユダヤ人の間で「平和」という時、その「シャローム」という言葉は、ただ単に争いが無いというだけでなく、豊かな祝福が満ち満ちている状態を指します。それは、あらゆる苦しみや不安から解放された状態でありましょう。それは、罪の赦しと癒しの救い主が共におられることが信じられる時に知ることのできる「平和」であります。

私たち人間は、どんなに努力しても、自分中心的・利己的な考えなどから自由になることはできず、その罪を自分の力で拭うこともできません。また様々な理由で、断絶の孤独の中から這い出せないでいる場合もあるかもしれません。そこに、本当の意味での「平和」はありません。そこで、

平和の君である、御子イエスご自身が揺るぎない「平和の契約」（イザヤ54：10）をもたらす救い主として、あちらから来てくださったのです。その主イエスの十字架と復活による救いの恵みの故、私たちは、自分のどんな過ちにも向き合うことが出来、悔い改めて、赦された罪人としての歩みが許されるのです。その時、いかなる隣人も同じ神の赦しと憐れみの中にあることを知り、自分も、人との和解を望む者となるよう変えられていきます。隣人も自分も共に罪赦された者同士であるという認識は、「平和」構築のための貴重な基盤となります。

私が英国で26年前に暮らし始めた時、英国と日本の二国間は一応「平和」の状態であるはずでした。しかし、かの地に着くと、第二次世界大戦で日本軍の英国人捕虜だった多くの人たちは、日本人に対して非常に激しい怒りを持っていることを知り、初めは恐れおのき何もできないというのが自分の情けない姿でした。けれども、自分の国が過去に行ったことのために苦しんでいる隣人がいるのを知っていながら何もしていないのは罪であると思い悩んでいるところへ、神様は、元捕虜の方々と和解礼拝への道を開いて下さり、思いがけない赦しと癒しの恵みの深さを知ることができたのです。そこで主イエスが与えてくださった「平和」の喜びを知りました。

十字架の道を通られた主イエスは、全くの断絶の状態であるところにも和解の希望を与えて下さり、そこに平和を実現して下さる方なのです。さらに、主イエスは、私たちを、断絶と孤立に留まっていなくて、神と共に、そして隣人と共に生きるために、「平和」を実現するための器としてお用いになりたいのです。主イエスに導かれて、「平和」のための器として仕えるとき、聖霊の働きが臨まれ、そこに平和は実現されていきます。「平和」は主がもたらして下さる聖霊の賜物です。その聖霊の働きに生かされる時、私たちは「神の子」と呼んでいただけるのです。そこに祝福があります。その祝福の満ちた道を生きていくよう、主イエスが私たちを呼んでおられます。



於 三重県紀和町英国人兵士墓地 アガペワールド主催による戦時中の捕虜イルカボーイズ追悼礼拝にて。英国から追悼礼拝に来られた元捕虜、また家族と共に。

2014年 聖公会「女性」フォーラムについて

東京教区 松浦順子

今回で22回目になる聖公会「女性」フォーラムは東京で開催しました（7月20、21日）。テーマを決めるにあたって春から話し合いを持ってきましたが、女性の司祭按手の実現を求め、男女・聖職・信徒の間のよりよいパートナーシップの形成を目指して歩んできたわたしたちは、いったいどこまで来たのか、何を成し遂げ、何ができない



しているのかを振り返って先に進む指針にしたいと願いました。そのために選んだのは旧約聖書の出エジプト記（15：21b）のミリアムの物語でした。そして1997年アドベントの祈りの会のために在米中の上田亜樹子司祭（当時は執事）が仲間たちに送ってくださった祈りの詩「夜明けを

待って」からフォーラムのタイトルを「ほんとうに夜明けはきたのでしょうか」としました。サブタイトルは出エジプトの言葉「主にむかって歌え。主は大いなる威光を現わし馬と乗り手を海に投げ込まれた。」としました。幸い上田亜樹子司祭が在京で、全面的な協力を得ることができ、開会礼拝でこの物語を語っていただきました。

オリジナルの聖書では「ミリアムとすべての女性たち」が歌え！と呼びかけているにもかかわらず日本語では「他の女たち」となっていることもわかり、昔も今も女性のリーダーシップは軽んじられてきていることをあらためて痛感しました。夜は明けないように思えることも多いわたしたちの様々な状況を、だからこそ諦めず、したたかに求め続けようとフォーラムのすべてのプログラム（4つの分科会を含む）の中で分かち合い、語り合いました。今回も女性デスクやジェンダープロジェクト、ことにニューヨークの国連女性会議のことなど充実してわかりやすい報告があり、普段なかなか見えにくい聖公会の女性たちの動きを知ることができました。閉会聖餐式では滞日中の英国聖公会の半田・ウィリアムス・郁子司祭の説教を聴くことができたのも幸いなことでした。会場の神田基督教会は、繁華街の真ん中で決して環境がいいとは言えないかもしれませんが、牧師の橋本司祭が終始参加してくださいましたし、プログラムによっては男性信徒、聖職の参加もありいつになく参加者の多いフォーラムでした。

（聖公会新聞 8.9月号にも報告掲載）

「2015年第23回聖公会女性フォーラム」は、
7月19日(日)～20日(月・祝)に、
神戸教区岡山聖オガスチン教会を会場に
開催する予定です。
みなさまのご参加をお待ちしています。
どうぞご予約しておいてください。

韓日聖公会宣教協働30周年記念大会に参加して

九州教区、宮崎聖三一教会、
フィリピン聖公会中央教区宣教協働委員会委員長、
エリザベツ、バイカー博子

10月20日から23日まで韓国済州島で開催された、韓日聖公会宣教協働会議に参加させて頂いた。

そもそも、誘われた際には「え？チェジュドー？いいかも？」というかなり不謹慎な軽いノリで即答したのだが、それがいかに浅はかであったかを知るのに長くはかからなかった

会場はインドル リトリート センターという広大な敷地内にあるカトリックの研修施設で、草原のただ中にあり、歩いて行ける範囲にはコンビニ一つない、という所であった。そこで、韓国屈指の一大観光地、リゾートアイランド、ハネムーンのメッカ、韓流ドラマのロケ地、などと書かれているガイドブックの謳い文句からはほど遠い真剣な3日間の日々を、缶詰状態で過ごしたのである。

今大会の主題である「生命、平和、人権、東アジアにおける聖公会の役割」に基づく、講演、討論、現場報告、グループでの分かち合いなどが毎日行われた。あまり予備知識もなく勉強不足のまま参加したものだから、それぞれの重く深刻な課題を消化しきれず、そのまま次の課題に移るので正直ついて行くだけで精一杯であった。帰国した今も脳の飽和状態が続いているような感



済州教会の成司祭と聖歌隊 - 平和の歌 -

じがしているが、要するに加齢による理解力の低下とも言える。

大会全体の客観的な報告については今後声明文が出されるので、ここではわたしが感じた2、3の事柄について述べたいと思う。



濟州43 平和公園

開催地が濟州島であったことには深い意味があり、私をもっとも心を揺さぶられたのはこの地で自分が生まれた頃に起こった4.3虐殺事件である。ここでも犠牲者の大半以上は女性、子供、老人という弱き人たちであった。行く前にもこれに関する本を少し読んで

はいたのだが、やはり実際にその土地に立って、犠牲になった親族のおられる呉光現兄の真に迫った話しを聞くと、事件に対する臨場感が全く違っていた。知らなかった事に対する後ろめたさ、知ってしまった事実への心の痛み、知ってしまったが故にそれに対して何もできない自分への苛立ち、情けなさ、「赦す」と言う事の難しさ、それ以上に「赦してもらおう」との難しさ。いろいろと複雑な感情が襲って来て、心が乱されてしまう。キリスト者として主イエスが全ての弱き人々に注がれた愛の心に倣って行動して行かねばならない、と言う事は解ってはいるのだが…。やはり、祈って聖霊の力により頼みお互い協力し、できる事から実践していくなかで、導きがあるのかもしれない。

ちなみに、帰国してからも、もっと詳しく知るべきだと思い、金石範氏の「火山島」を借りようと図書館に行ったのだが、どうしたものか市立、県立図書館ともに全7巻のうち1巻から5巻までが紛失しているのである。

大会参加者87名のうち、女性参加者数が部分参加も含めて16名に過ぎなかったのは残念なことであった。振り返りをみても過去の大会における女性参加者は少なかったようだが、その原因の1つに「女性の積極性の不在がある」とあったが、はたしてそうだろうか。そのつど、女性参加者を募る積極的な声かけはあったのだろうか。今回は、急遽、女性だけの分かち合いの時間を持ち、お互いの現状の情報交換、提案ができた事は小さいながら1歩前進ということか。例えば韓国側の参加者はすべて自費参加で、国外へのこのような大会では、同行の通訳の費用も全て参加者がもたなければならぬので、どうしても参加者は限られてくるという現状には少なからず驚いた。それに対し、日本側から、組織立った財政の確保や支援の方法など経験をふまえた提案がなされた。もっと歴史的な問題についても女性の立場からの意見を聞きたかったのだが、なにしろ時間が限られていたのでこれからは、定期的に女性の交流の機会を持ちたいという提案では一致した。

会議室に空きがなく、急遽日本側の参加者のオンドル部屋に布団を敷いてみんなで車座になって話し合ったのだが、これがかえってリラックス効果があって和気あいあいと親しみを増すことができたと思う。

今回の出会いをここだけで終わらせたくない、という皆さんの気持ちをふまえて今後の交流に繋げて行きたいと希望している。

膨大な資料の量を見るにつけ、如何に多くの方々が準備の段階から苦勞されてきたかと思うと、感謝の気持ちで一杯になり頭が下がる。特に通訳の司祭様達は食事もゆっくりとれないくらいの八面六臂の大活躍であった、心からの拍手と賛美をおくりたい。両国の文化、歴史、とくに教会用語に精通していなければ到底このようなハイレベルの会議の通訳は一朝一夕にできるものではないからである。この方々もまた30年の宣教協働の実りであり、未来への希望である。私達も、今後

お互いの言葉を少しでも学ぶ努力をして、せめて交流会の会話くらいは通訳をわずらわせることなく、自分達でおしゃべりができれば、主の兄弟姉妹として一層親しくなることができるでしょう。このような得難い経験の機会をお与え下さった主と皆様は、心からの感謝を申しあげます。

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑩ ■ ■ ■ ■ ■

～ “もと男” で片付けないでください～ 中部地区 司祭 アンブローシア 後藤香織

10月20日(月)～23(木)、濟州島で行われた、韓日聖公会宣教協働30周年記念大会に参加をさせていただきました。この大会の宿泊に関して事前に問い合わせがあったのですが、相部屋の相手を男性の司祭と一緒に良いかというものでした。さすがに男性との相部屋は勘弁してくださいとお願いしたところ、誰か相部屋の相手を決めてくれとのこと。急遽、ある女性に、相部屋をお願いをしました。

宿泊が伴う集まりでは、一般的に性別の問い合わせが申し込みのときになされます。女性と男性を分けて部屋割りをするためですね。女性と男性を分けて部屋割りをするのは、女性と男性が一緒に部屋で寝泊まりするのは、色々と不便だからでしょう。今回の出来事は、やっぱりわたしは「女」だとは思われていないゆえに起こっています。“もと男”の後藤が女性と相部屋になるのは、好ましくなく、男性と相部屋なら問題がないという判断なのでしょう。

現在のわたしの身体の基本的な状態、機能は男性よりは女性に近い状態です。どう逆立ちをしても、男性のお風呂には入れませんし、男性の中で下着になって着替えをすることにはやはり抵抗があります。一方で、わたしが女性のお風呂に入ることや、一緒に着替えをすることに、抵抗をおぼえる女性がいるのも事実です。部屋割りの時に、わたしとの相部屋は嫌だという声があるのかもしれませんが。以前、ある女性から「後藤司祭と一緒にはお風呂に入れない」と他の人の前で言われたこともあります。別に、

一緒にお風呂に入って欲しいなどをお願いしてはいないのですが…。わたしと一緒にお風呂には入れないこと、それはひとえに、お前が「男」だからという無言の圧力を発言から感じます。

そんな些細なことに、目くじらを立てるなんて思われるかもしれませんが。しかし、つねに偏見を押しつけられるのは、やはり心地よいものではないのです。

日本聖公会の中のトランスジェンダーは、わたし後藤一人ではありませんので、宿泊を伴う様々な集まりに、わたしたちトランスジェンダーが参加する機会は増えることがあっても、減ることはありません。その度にわたしたちは、お前は“もと女”だ、“もと男”だという偏見に晒されなければならぬのでしょうか。残念ながら、偏見をなくして行くことは、わたしたちだけの力では出来ないのです。偏見ではなく、事実でしょうという声が聞こえてきそうですが、どうして、わたしと「一緒にはお風呂に入れない」のか、考えてみていただけると幸いです。

考えてみても、やっぱり「無理」な場合もあるかもしれませんが。でも、その思いをみんなの前で口にされるのは、やっぱり悲しくなるものなのです。

※ “もと女” “もと男”：皆さんが理解しやすいように、あえてこう表現しましたが、トランスジェンダーの性自認が変化するという意味ではありません。



◆ ◆ 女性デスクだより ◆ ◆

韓日聖公会宣教協働30周年記念大会に参加して—女性の課題を中心に—

木川田道子/管区 女性デスク



今回の大会に女性デスクとして参加する機会をいただいた。3泊4日という限られた時間ではあったが、この間に日韓の女性たちの交流を通して考えた私たちの課題について特に焦点を当てて書いてみたい。

事前にいただいた案内のプログラムには女性たちの正式な交流の時間はなかったが、スタッフの方々の調整のおかげで、3日目午後の分団討議の時間に女性で1グループ（韓国側9名、日本側7名）を作ってもらって話す時間を持つことができたほか、食事時や、夜の時間に井戸端会議をすることができた。

この10年間（あるいは30年間と言ってもいいかも知れないが）、双方の教会女性の交流は個別的にはあったものの、全体としては必ずしも活発というわけではなかった（と私は思う）。一番近い国なのになぜだろう？ お互いどんな活動をしていて、そこにはどんな課題があるのだろうか？ 何か協働できることがあるのではないかと・・・そこで分団討議では、まず互いの現状を知ることから始めた。

はじめに大韓聖公会オモニ会やGFS、日本聖公会婦人会の活動について聞き合った後、大韓聖公会の両性平等局の担当者、崔良順さんから、年に数度開催されるという団体連絡協議会の様子や双方の女性の聖職者を巡る状況、日本の池住圭さんから TOPIC (Towards Peace In Korea) の活動報告などを聞いた。これらの中では、たとえば、女性が何か活動しようという時に資金の確保が難しいこと、女性にはさまざまな情報が届きにくいこと、女性の聖職者が必ずしも男性と同じような働き方ができているわけではないこと（たとえば韓国では主任牧師として働く女性の聖職は少なく、社会的な施設のワーカーとして働いておられる方も多いらしいこと、日本にはガイドラインをめぐる問題があること等）などが日韓双方に共通することとして挙げられた。その他、韓国には「女性宣教主日」（9月第1日曜日）があり、献金が女性の活動のために献げられること、両性平等局によって今年10年ぶりにジェンダーに関する意識調査が行われたこと、その結果10年前と意識はあまり変わっていないことがわかったこと、GFSが脱北女性の自立支援のための「井戸のほりプロジェクト」としてカフェを開いていること、女性たちが妊婦さんのためのお祈りの本を作ったことなどを聞くことができた。時間があればもっと細かく聞いてみたいことばかりだったが、その他にも最終日に採択する声明文に女性たちの声をどう盛り込むかを考える必要もあり、いかんせん時間が足らなかった。結局、意見を集約する間もなく、それまでに拾い上げた意見を持って私が女性グループ代表として声明文起草委員会に参加することになった。

この日の他、1日目の分団討議などで出ている意見を合わせて紹介すると、「20周年大会も女性

の参加が少ないことが反省点だったのに、今回も同じ。」「そもそも情報が来なかった」、「参加資金がなくて来て欲しい人が来れなかった」、「韓国の女性の教役者に出会いたかったが参加者がおられず残念」、「交流が活発でなかった原因の一つに“女性の積極性の不在”（韓国報告書）が挙げられているが本当にそうなのか？」（これに対しては、積極性がないのではなく、意思決定のレベルに女性が参加できていないことが問題では、という意見も）、ほかに前回の声明文づくりに関わった方から「10年前に声明文を作ったのは男性ばかりだった。今になって思えば（20周年声明文に盛り込んだ）“女性のリーダーシップを「育成」する”という言葉は傲慢だったと思う。」という声や「信徒レベルでの参画が必要」、「担当者を置いて定期的な交流の機会を持つのはどうか」等の意見があった。

皆さんの思いをどう声明文に盛り込めばいいのか。井戸端会議をしている別室のメンバーに意見を聞きに走ったり、起草委員会のメンバーとの意見のやりとりを経て、女性グループの課題は最終的に次のようにまとめられた。

『両聖公会は、「宣教協働20周年記念大会共同声明」に掲げた女性の交流が不十分であったことを反省し、女性が互いに学び合い、協働できる環境を整える。そのための定期的な交流を進め、意思決定機関および諸委員会における女性の比率が30%以上となるように努める。』

反省や数値目標を入れられた他、情報交換の必要性や資金確保についても全体に関わる項目で盛り込むことができたのは成果だと思う。

気弱？な私だけではこうは盛り込めなかつただろうから積極的な意見を出して下さった起草委員のメンバーに感謝したい。あとはいかにこれをみんなで実現していくかにかかっている。日本の女性を中心とする団体や各教区ともぜひこの内容を分かち合いたい。

日程全体を通し、これまで数年かけて双方で行き来しながら交流を積み重ねてきた日韓の若い方々が、和気あいあいと相談しながらプログラムの進行を手伝っておられる姿をととても頼もしく、またちょっぴりうらやましく感じた。パネルディスカッション「40年に向けた課題と展望」の中では、日本側の発表者のお一人、松山健作さんが歴史に埋もれがちな女性の働きについても言及され、励まされたと同時に、改めて、歴史を知ること〜特に誰の視点からの歴史なのか〜が私たちのこれからのより良い関係づくりのために必要かつ重要なことだと思えた。

私たちは似たような社会的背景（共にGGI（※）が100位台）を持っており、毎日の生活の中で困難に感じている事柄に対して、情報交換や協働して行くことができると思う。毎年、両聖公会はUNC SW（国連女性の地位委員会）／ACC代表団会合に代表者をそれぞれ送っているが、いつか隣国同士である強みとつながりを生かして国連の場でのアドボカシー活動やイベントを共催することも夢でなくなるかも知れない。私たちはもっと互いを知り合い、学び合い、理解し合い、助け合い、折り合う関係になっていくことができると信じている。

（※）GGI：ジェンダーギャップ指数。ジュネーブにある民間団体、世界経済フォーラム（WEF）が毎年各国の政治参加、経済参加、健康、教育の分野におけるジェンダーの格差を指数に表して公表している数値。2014年10月28日の報告では、142カ国のうち日本104位、韓国117位。上位20カ国のうち、12カ国がヨーロッパの国（アイスランド、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなど）。アジア地域ではフィリピンが最も高く9位。次に高いのは42位のモンゴル。（参照：WEFHP The Global Gender Gap Report 2014、一般財団法人アジア・太平洋人権情報センターHP）

■ ■ ジェンダープロジェクトだより ■ ■

映画『ミルク』が教えてくれたこと

東京教区 聖職候補生 セシリア 下条知叫子

9月27日(土)京都教区センター会議室にて、映画『ミルク』を見て学ぶ会が催された。

『ミルク』の舞台は1970年代の米国。主人公ハーヴィー・ミルクは40歳になる頃、自身がゲイ(同性愛者)であることを公にし、それまでの仕事を辞め、愛する人と共に生き始めた。そして、同性愛者たちが一市民として認められ、暴力を受けず、差別を撤廃し、生存権が守られて生きることのできる社会を求めて声を上げ、活動を展開してゆく。

ハーヴィー・ミルクという人を知らなかった私は、彼が同性愛者(ゲイ)であるということで、同性愛あるいはセクシュアルマイノリティー(性的少数者)について考えさせる映画なのだろうという先入観をもってこの映画を観た。しかしその予想とは別の大きな気づきを『ミルク』は私に与えてくれた。それは、人は誰かを愛するとき、相手が同性であるか異性であるかということとは関係なくその「人」を愛するものだということである。男性であるミルクとそのパートナー(男性)が誠実に、真剣に愛し合い関わり合う姿に、私の中にあった“パートナーとして愛するのは異性であるのが自然”という固定観念は完全に崩された。

私の場合、自分は女性で生涯のパートナーとして選んだ相手は男性であった。けれどよく考えてみると、彼が男性だから選んだというわけではない。意識すること無く選んだ相手が男性で、異性だった。だから教会でも日本の法律でも結婚という形を認められ、それに守られて生活することができている。だがそれは、たまたま社会の制度がそのようになっていたのでそれに当てはまっただけのことなのではないか。相手が異性であれ同性であれ、人が誰かを誠実に「愛する」とき、他の誰かがそれを阻害したり否定してよいはずはない。人として愛し合い、関わり合いながら生きてゆきたい生活したいという最もありふれた、しかし切実な願いを、誰が踏みこじってよいだろうか。

同性愛者であることを公言しながら幾多の試練を乗り越えて、ミルクは市議員になったのだが、そう長く議員として働くことはできなかった。彼に強い反発を持っていた元議員ホワイトの銃弾に彼の協力者であった市長と共に倒れたとき、ミルクは48歳だった。その訃報が世間に公表された日、議会の前には何万という人々がろうそくを手に集まった。それは彼が、同性愛の問題に終始することなく、黒人やアジア人、高齢者、児童、下級労働者など、様々な社会的弱者の救済のために身を挺して戦ったからだ。そしてミルクは多くの人々に希望を与えた。

世界の聖公会では同性愛への理解をめぐるさまざまな対立が起きている。しかし日本聖公会においては、あまり語られることがないように思う。私たちはこの問題を他人事にし、沈黙していいのだろうか。抑圧されている多くの人々の解放への一歩が、一人の上げた声から始まったことを心に刻みたい。

(映画『ミルク』 (2008) アメリカ

監督: ガス・ヴァン・サント/音楽 ダニー・エルフマン

出演者: ショーン・ペン、ジェームズ・フランコ、ジョシュ・ブローリン(他)

